

天の国籍と学籍簿

大学教育学部 清水 禎文

¹⁷ 兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。¹⁸ 何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。¹⁹ 彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。²⁰ しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。²¹ キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

¹ だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、このように主によってしっかり立ちなさい。

フィリピの信徒への手紙 3章 17節-4章 1節

10月も半ばを過ぎました。いつの間にか水の森をわたる風も、すっかり秋風になり、本学の敷地に植えられた木々も色づき始めています。先週、3年ぶりに対面で実施された大学祭も無事に終了しました。これから、クリスマスに向け、忙しい日々が続くことと思います。忙しい毎日ではありますが、このひと時、聖書に記された御言葉を通して、私たちの共同体、宮城学院に集う群れに語りかけられている事柄を、皆様と一緒に確認して参りたいと思います。

本日は、フィリピの信徒への手紙の一節が与えられました。最初に、フィリピの信徒への手紙について、確認しておきます。

フィリピの町はキリスト教の福音宣教を聞いたヨーロッパ最初の町でした。後に、4世紀のキリスト教公認とともに、フィリピは大司教所在地となり、初期キリスト教時代において重要な役割を果たした教会が置かれました。このフィリピの町に福音の種を蒔いたのが、他でもないパウロでした。その経緯について、使徒言行録 16章 9-15節には、次のように記されています。

⁹ その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。¹⁰ パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすでにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。

¹¹ わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、¹² そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。¹³ 安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集っていた婦人たちに話をした。¹⁴ ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。¹⁵ そして、彼女の家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

使徒言行録において確認できるように、パウロは幻によって不思議に導かれ、予定を変更して、フィリピを訪れます。そこでリディアという女性と出会います。この出会いが、フィリピの教会の礎となりました。

フィリピの教会は、パウロにとって特別に親密な関係にあった教会でした。フィリピの信徒への手紙を読むと、フィリピの教会は「もののやり取り」(4:15)をした教会であり、パウロを物心ともに支えた教会でした。親密な関係にあったためか、パウロはこの書簡において信徒たちへの熱い想いを包み隠さずに綴っています。言葉使いは、感情の起伏を隠すことなく、直截的であるように感じられます。パウロの人柄がにじみ出ている文章となっています。そしてパウロの信仰も、コンパクトに凝縮されています。『聖書大事典』には、「この書簡のいくつかの基本内容は傑出しており、注目に価する。おそらく新約聖書の他のどの書も、喜びに満ちた態度で困難に立ち向かうことの必要を、本書ほど明言していないであろう」と記されています。

パウロの「喜びに満ちた態度で困難に立ち向かう」姿勢の秘密を探っていくことにしましょう。

フィリピの信徒への手紙第3章において、パウロは自分の生涯、回心と現在を短く振り返っています。血筋では、生まれて八日目に割礼を受け、ヘブライ人の中のヘブライ人。信仰では、律法を固く守り、非の打ちどころのない者でした。そして、教会を迫害して回りました。パウロは品行方正な学徒ではなく、かなりの暴れん坊でした。しかしパウロはダマスコに向かう道でイエスと出会い、その後は180度方向転換をしました。3章8節には「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています」と記されています。

パウロは、この世の事柄をすべて捨てました。そしてパウロは「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕えようと努めているのです」(3:12)、「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ……目標を目指してひたすら走ることです」(3:13b-14)。パウロは価値観の根本的な転換を根拠として、自分の中にキリストの形が宿るように努

めました(3:21)。

こうしたパウロの回心の根底にあったものの表現が「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています」(3:20)です。パウロが捨て身の伝道をすることができたのは、地上での国籍——パウロはローマの市民権を持っていました——ではなく、ユダヤ社会における血筋でもなく、若いころから学んだユダヤ教の教義でもありませんでした。彼自身の内側には、彼の行動を支える根拠は何もありませんでした。彼を支えたのは、天に自分の名前が刻まれているという確信だったのです。究極的なものによって、しっかりと支えられているとの確信に突き動かされて、パウロは伝道の旅を続けたのです。その旅は、何度か牢獄につながれるなど苦難に満ちたものであり、最後はローマでの十字架につながっていました。しかし、パウロの旅は、苦難ばかりではなく、むしろたくさんの喜びに満ちたものでした。

さて、本国が天にある、国籍は天にあるとのメッセージから少しずれることになるかも知れません。しかし、興味深い話を見つけたので、紹介させていただきます。

宮城学院資料室から毎年『宮城学院資料室年報 信望愛』が刊行されています。最新の第 27 号には「1943(昭和 18)年度卒業生の学籍簿——宮城高等女学校の「学校挺身隊」——」と題する報告が掲載されています。資料室の佐藤亜紀さんのお仕事です。

この報告によれば、宮城学院中高の倉庫から、1940 年代に宮城女学校を卒業した生徒たちの学籍簿が発見されました。ビニールテープで括られた2つの束から、1941 年度から 1944 年度卒業生に係る 5 冊の学籍簿が出てきました。学籍簿には氏名、生年月日、卒業年月日、学業成績、入学前の学籍——卒業した小学校——、親の職業、卒業後の状況などが記録されているようです。

佐藤亜紀さんの分析も、とても興味深いものがありました。当時の生徒は仙台市内を中心としながらも、宮城県全域から集まって来ていたことが分かります。卒業後の進路は、時局柄、挺身隊に奉仕する者が多くありました。父親の職業からは、多くの生徒の家庭が都市の市民層であったことが読み取れます。宮城学院が仙台という都市に立地していたことありますが、裕福な家庭の子女が集う学校であったことが想像されます。また、戦時下の教育課程(カリキュラム)の変更についても、史料に基づいた議論がなされています。興味深い論考ですので、皆様も是非ご一読いただければと思います。

本日、私の強調したいことは、学籍簿の大切さです。学籍簿是一片の紙に過ぎません。しかし、学籍簿には単なる学生の記録にとどまらない重要な意味があります。

戦争前に上海に東亜同文書院という学校がありました。戦前の日本が海外に設置した高等教育機関の中でも最も古い歴史を持つ学校です。台北帝大や京城帝大よりも長い歴史を持つ学校です。東亜同文書院の教育理念は、教育文化事業によって、日中友好提携を成し遂げることにありました。実際、学生の中には、日本

人ばかりではなく、地元の中国人も含まれていました。1945 年、日本の敗戦に伴って、東亜同文書院も 40 年余りの歴史を閉じることになりました。学校の財産を整理しなければなりません。時間も限られていたのでしょう。ほとんどの財産は持ち帰ることはできなかったようです。学校関係者が持ち帰ったものは、一体何だったのか。それは、東亜同文書院に学んだ学生たちの学籍簿でした。

なぜ学籍簿だったのか。これは伝聞ですが、当時の事務長が「学籍簿はこの学校で学んだ学生たちが、たしかにこの学校で学び、生きた証拠である。こればかりは、何があってもなくすわけにはいかない」と言い、日本に持ち帰ったそうです。学籍簿は「この学校で学んだ学生たちが、たしかにここにいました」という命の記録なのです。

東亜同文書院の学籍簿は、現在、愛知学院大学において大切に保管され、公開されているそうです。

今回発見された宮城女学校の学籍簿ですが、さきほど私は「学籍簿是一片の紙に過ぎません。しかし、学籍簿には単なる学生の記録にはとどまらない重要な意味があります」と申し上げました。学籍簿に名前を刻まれた方々は、宮城女学校に学び、生活し、そして卒業したことを、きっと人生における貴重な思い出として、また誇りとして、その後の人生を歩まれたことでありましょう。一人ひとりの人生の貴重な記録です。この意味でも、学籍簿は学校の宝として大切に保管されるべきでありましょう。

本日は、パウロ書簡に示されたパウロの確信、「我らの国籍は天にあり」から、パウロの信仰と行動力の源泉について確認しました。自分たちの名前は天に刻まれている。だから、この世の事柄——血筋、知識、社会的地位や財産など——に惑わされることなく、救いの確信に支えられ、安心して前に向かって進みましょう。これが、フィリピの信徒への手紙に示されたパウロのメッセージです。

ここから脱線して、今回発見された宮城女学校の学籍簿の話をしました。天に刻まれた国籍と学校の学籍簿は、もとより比較すべきものではありません。しかし、一人の人間がたしかに生きていたとの証しであるという点において、天の国籍と学籍簿は同じように大切なものです。学籍簿はご本人にとっては大切な勲章であり、大切な拠り所であったと言えるでしょう。そして、学校にとっては、最も大切な財産と言えるでしょう。

宮城学院は今年で創立 136 年となりました。私たちは、長い宮城学院の歴史を引き継ぐものとして、学籍簿を大切にしたいと思います。そして、本学に学ばれた一人ひとりを心に留めたいと思います。同時に、同じように大切なものがあります。それは、今現在、宮城学院に集う一人ひとりの子どもたち、生徒たち、学生たちに、長い人生を歩んで行く上で必要な力、生きる力をしっかりと身につけてもらうことです。一人ひとりが「宮城学院で学んで良かった」としっかり心に刻んでもらえるように努めることです。そのために、ここに集まられた教職員の皆様と、心と思いと力を一つにして取り組んで参りたいと思います。

(2022 年 10 月 19 日)